

神の言葉・人の言葉——〈あわい〉の言葉の生態学——

目次

第一章 日本語の不安

- 1 「神の言葉」の言語観……………岡部隆志……………2
——折口信夫・時枝誠記・吉本隆明——

- 2 表象としての〈日本語〉……………丸山隆司……………45

第二章 宮廷文化の中の言葉

- 3 「草木言語」論——オノマトペの発生——……………清水章雄……………78

- 4 律令官人の言葉の位相——「遊行女婦」の発生——……………飯田勇……………131

5	「まなざし」の生成	大胡太郎	171
	——おもろ歌唱者・安仁屋真昭と『安仁屋本おもろさうし』との対話——		
第三章 神・共同体・言葉			
6	南島の神話生成と巫女のことば	保坂達雄	214
7	対立構造と反転表現——ヤミ族の掛け合い歌——	皆川隆一	249
	あとがき		287

1 「神の言葉」の言語観

岡部 隆志

——折口信夫・時枝誠記・吉本隆明——

1 「発生論」のまなざしを問う

文学を研究するものにとって、文学の言葉がなぜ成立するのか、いつどのような契機で成立したのか、と問うことは、必ず反芻される問いとしてあるはずである。

この問いは、二つの場面において発せられるであろう。一つは、今という時点で文学は何故発生するのかという問いであり、もう一つは、歴史上いつの時点で文学の言葉は成立したのかという問いである。生物学的な発生で言えば、個としての人間の誕生と、種である人間の誕生の問題ということになるか。個体発生は系統発生を繰り返す、と言われるように生物学的には、個の誕生は、種としての人間の発生をその都度繰り返す。果たして、文学の言葉の発生もまたそのように言えるのだろうか。

今という時点での文学の言葉の発生の根拠は、たぶん人間の内面の解明に力点がそがれるであろう。すでに我々の社会には文学的言語が氾濫している。その氾濫の中で何故、文学的言語が再生産されるのか。惰性もしくはそれが一つの経済活動として動いてしまっているから、という面を抜きに語れば、その根拠は、個々の人間の内部にある文学を必要とする心のあり方とでも呼ぶような何かに求めざるを得ない。

この個体発生は果たして系統発生を繰り返しているのだろうか。歴史上の問題として文学の言葉の発生を問うたときに、その発生の根拠として言い当てられる何かは、われわれの今の文学の言葉の成立の根拠として繰り返されているものなのだろうか。

このように問うてみたのは、実は、文学の歴史の検討(つまり、それは、起源の検討ということになるだろう)とは、常に、このような問いに強くさらされることを指摘しておきたかったからである。文学は何より言葉である。文学の言葉が、日常的にわれわれが使う普段の言語と違うことは、誰にでも理解される。実は、文学の発生を問うことはこの違いを解き明かすようにと問うことでもあるのだ。

文学の言葉の発生を論じることは、遺跡発掘のように物的な証拠を集めて証明していくような作業にはなりにくい。起源の問題とするならば文字成立以前の時代を扱うわけだから、古代の限られた数少ない文献資料や、地域や民俗の古い習俗や口碑等を手がかりに、基本的には人間の内面の構造への考察を最大の根拠に論じていかざるを得ない。とすれば、どうしても、今われわれが文学を必要としているその心のあり方が、歴史的な意味での文学の言葉の発生の問題に反映されてしまうことを防ぐことはできない、という問題を抱える。